

健康文化

## 九年目の夏

今井田 二三子

今年も従姉妹が主人のUと共に訪れました。Uが出張先の和歌山で脳出血で倒れたという知らせを受けたのが九年前の冬のことでした。

電話の奥の従姉妹の声はとり乱れ、和歌山市内の病院に運ばれ重篤な状態であるということがやっと理解できたのが二・三回目の電話を受けてからのことでした。脳幹部の出血で、再出血のため手術が延期されるという知らせで私達の憂慮は深まってゆきましたが、従姉妹は手術に一縷の望みを託してか、手術の日を焦って待っている感じが感じられました。

そして、その結果は生命はとりとめることはできたものの、記憶はすべて遠い彼方に消え去り、助けを借りなければ歩行も不確かな有様と伝えてきました、しかし従姉妹はリハビリによる快復に期待をかけていたようでした。その後兵庫の病院に移り、さらに郷里である岐阜の病院で療養生活を始めましたが「鞆、鞆」と叫んで夜中に病室を飛び出そうとしたり、周囲の者には理解できない言葉を口にして落ち着かない有様がつづき自立、復職の望みは絶たれ、従姉妹自身も障害児の学校に勤めを持っていたため、仕事を続けるか否かの決断に迫られ、また若くして障害を得た者の受け入れ施設がないため二回目のパニック状態が続き、夜、結論のでない長い電話を受けたのもその頃でした。

その後入院先の病院のケースワーカーの方の尽力で彼らの居住地である兵庫県内の施設に入所することができ、やっと落ち着いた時には発病以来すでに二年余りが過ぎていました。しかし、ほっとしたのも束の間で、或る日Uは車椅子で施設を抜け出し坂道から転落して脊椎の圧迫骨折を引き起こし、また安静を強いられることになりその後は痛みのため動くことを極端に嫌う様子でした。そのうち従姉妹の両親が相ついで他界し、その寂しさと心身の疲れを少しでも癒すことができればと思い夏の休暇の数日を昼寝にでも来るように声をかけたところ主人のUも共にということになり、骨折の快復後夏、冬の休暇にUの実家に連れて帰っていたのを、期間の半分を私の所に滞在することになり今年で五年目の夏になりました。

元気な時のUは、いつもニコニコとして穏やかで静かな口調で話す人でしたがこの頃口をついて出る言葉は「痛い」、「バカ」、「うるさい」の三語で滞在期

間中は殆どこの言葉に尽きます。Uの高校時代の国語の先生の名前を告げると、機嫌の良いときは「知っています」と唯一このときだけニッコリとして普通の言葉が返ってきますが、更に何かを問いかけようとする適切な言葉が思い浮かばないのか「うるさい」とはね返ってきます。起き上がらせたり、立ち上がらせようとする「痛い」「バカ」がとんできます。元気な時もそうであったのか腰掛けておれば一日中退屈ではない様子で、腕を組み、眉間に縦皺を寄せ目を閉じ頭の中に何が浮かぶのか、時折指が文字を書くしぐさでテーブルの上を動いています。私達が頭の中の思いを知りたくて何を書いているのか尋ねても返事は返ってきません。時に声高にありふれた世間話をしていると「うるさい」と一喝されます。彼の頭の中では私達の推測以上に話の内容が理解されているのではないかと思うときもあります。

光ファイバーの仕事を続けていたと聞き、光ファイバーの言葉を出しても何の反応もありませんでしたが、従姉妹が新聞に載った数学の問題の数式を口にしたとたん「何、X」と問いかけがあったと嬉しそうに告げてくれました。その後、Uの頭の中にはどんな数式の展開があったのでしょうか。

従姉妹に支えられながら歩行器で歩行練習中に電車の通過する音を耳にして「電車だね」また電車の色が目にとまったのか「赤い電車だね」という言葉がでたそうです。「今は親、子、兄弟そして夫婦もばらばらの生活を送っている家庭が多いのに貴方達は変則的であるけれど家庭らしい生活をしているのではないの」連休にはUの好物の鰻の蒲焼き、鮪の刺身、蓮根の煮付けなどを朝早くから用意をして四之宮から相生まで高速道路を車でとばし、また私の所に滞在している間も新鮮な食材を求めて三食Uの好みの食事を調理している従姉妹に言葉をかけたのが耳に入ったのか「何の話？」と予期しないまともな問いかけがありびっくりしたり喜んだりもしました。Uの頭の中は新しい記憶の保持は困難でも古い記憶は時折呼び覚まされたり、また或る程度の理解力、判断力は戻ってきているのかも知れません。それを思い今年はUの側で静かな声でゆっくりと話し、あまりつまらない世間話は慎もうと試みたところ一度も「うるさい」はでませんでした。女二人寄ればうるさかったのかもしれません。

「私はUから教えられたこと、得たものが一番多かったように思う、それだから今のUに昔の面影を重ねて感謝の気持ちで看ることができるよう思う」と今年の夏、従姉妹はポツリと洩らしました。そして今年は無事にUを施設に送り届けることができたという報せの末尾が、Uが生を全うするまでUを看とることで私自身の生き方を高めてゆきたい、と嬉しい字句で結んでありました。

(内科開業医)